高津ハンドボール回顧

高校 20 期 （1968 年卒） 稲葉 良幸

ハンドボールは、人気のあるスポーツの一つとはお世辞にも言えませんが、私が部活動として初めた昭和 40 年当時は今より遥かにマイナーなスポーツだったと記憶しています。どうしてそんなハンドボールに首を突っ込むことになったのか、その理由は今では定かではありませんが、私の頭には「高津のハンドボールは意外と強い」という言葉が今でも残っており、それに憧れて強い運動部に入ることを決めたのかも知れません。高津への入学後、中学時代にやっていた柔道部にまず入部するも、初日に首を絞められて“落とされ”かけ、これは殺されると思って退部し、ハンドボール部に籍を置くことにしたものです。「意外と強い」というのは、一般的な高校の強い運動部の体をなしていないのに、試合をすると結構強い、ということだったと思います。たとえば、監督といわれる立場の先生がおらず、部員たる生徒の規律は乱れ、服装はいつもバラバラであり、下駄やサンダルで試合会場に現れたりし、頭髪もいわゆる丸刈りではない、審判の判定に文句をつける等などでしょうか。「自由と創造」の高津の端的な現れ方かもしれません。いつの世でも、一見弱そうなのに本当は強いというのはカッコエーもんです。

高津のハンドボール部は練習がキツイということは入部してから知らされたものでした。かねてよりボール遊びが好きだったせいか、あまり違和感なくハンドボールを操ることはできましたが、その練習は過酷を極めました。部活動の指導は監督たる先生がいないために複数の先輩方に委ねられ、先輩によってはやや理不尽なしごきをする人もいました。特に一週間の夏合宿の辛さは筆舌に尽くしがたいものがありました。特に 1 年目の部員にとっては体力も備わってないためか、地獄の一週間でした。エアコンのない教室を雑魚寝の合宿所にするという環境で寝起きし、部員一人に最低二人の先輩が付くような形で、今では膝に悪いとして避けられているうさぎ跳び、ダッシュ（全力疾走）の繰り返し、等などを強いられ、徹底的に鍛え上げられました。あまりに衰弱して食事がのどを通らず、お茶や水で食事を流し込む者も数多くみられ、比較的胃腸が弱かった私などは食べたものを吐いたことが何度あったか数えられません。先輩諸氏のほとんどは、水を飲ませるな、苦しい練習が良い練習だ、と信じている風情、異口同音に、この合宿を乗り越えたら他のどんな練習もきつくなくなる、ハンドボールの腕前も一段と飛躍する、と激励してくれましたが、果たしてその通りであったのか、よくわかりません。先輩等は、無論好き好んできつい練習を部員に強いていたのではなく、また休みを返上して我々の指導にあたってくれていたのでしょうが、当時そこに思いを馳せる余裕は部員には全くありませんでした。

でも、そのような厳しい練習も今は良き思い出の一つ、特に一年生の夏合宿の最後の整理体操を終えたとき、鬼のようだった

先輩たちが拍手をしてくれ、ご苦労様と言ってくれた時、涙が出そうになったことは、今も鮮明に覚えています。また、なんと父親が迎えに来てくれ、帰りに上六の洋食屋でドライカレーとマカロニグラタンをご馳走してくれ、その美味しさは今も忘れられません。何故ドライカレーとマカロニグラタンという変な組み合わせだったのか、理由はわかりません。

夏合宿中、いつも励ましてくれた先輩の内、特筆すべきは、一年先輩で現在高津登校ハンドボール部 OBOG 会会長川上貴司先輩でした。川上先輩は夏合宿で我々と同じメニューをこなしながらも我々の体調を常に慮ってくれ、並外れた体力と運動能力を持った高津高校の逸材でした。一緒に全力疾走した際、次元の違うスピードで隣を音もなく過ぎ去ってゆく川上先輩を肌で感じ、一緒にハンドボールをすることができたのは光栄でした。このような人がたとえばオリンピックに行く人なのだと感心していましたが、大学生時代に起きた事故のためオリンピックに行けなかったのはとても残念です。

私は、2 年生の時に部のキャプテンを拝命しましたが、キャプテンらしきことをした記憶がありません。もっと私が向上心を持ってリーダーシップを発揮してキャプテンという役どころを全うしていれば、高津のハンドボールももっと違ったものになっていたかもしれません。また、入部理由であった「意外と強い」、「カッコエー」高津ハンドボールを実現できたかどうかも疑問、中途半端なままで私の高津ハンドボール部活動は終わりました。

大学に進学してハンドボールをさらに追及するという選択肢もありましたが、その道を断念し、ヨットという全くハンドボールと縁もゆかりもないスポーツを部活に選びました。ハンドボールをそこで終えたことにより、私の中では高校生活はすなわちハンドボール部活動そのものということになったような気がします。

私は弁理士を生業とし、東京で総勢 700 人弱の弁護士・弁理士事務所の設立パートナーの一人として事務所を引っ張ってゆく立場にあります。自然、私の履歴を詳しく披露する場面が時々あり、その際、高津高校ハンドボール部出身という履歴の一項目は私の自慢であり、光り輝くものとして存在していることは間違いのないところです。ハンドボール部活動で経験したすべてのことが今の私の血となり肉となっていることは疑いのない事実です。

以上